

した。それぞれ 3 回測定し平均値を算出し、①、②の面積差、また①高位における正中神経の扁平率（短軸長/長軸長）を両群間において統計学的に評価した。CTS 群は SANP, CMAP 潜時と正中神経断面面積差との相関をそれぞれ検討した。CTS 群は Quick DASH にて問診を行い、機能、症状スコアと正中神経断面面積差において相関を調査した。【結果】 両群における wrist crease 高位での正中神経断面面積の比較では有意に CTS 群にて増大を認めた ( $P < 0.01$ )。また wrist crease 高位断面面積から DRUJ 高位断面面積の差も有意に CTS 群にて高値を認めた ( $P < 0.01$ )。DRUJ 高位断面面積、扁平率は両群間に有意差は認められなかった。CTS 群において SANP, CMAP 潜時と正中神経断面面積差はともに有意に正の相関を示したが、DASH 機能、症状スコアと正中神経断面面積差には相関は認められなかった。【考察】 超音波による正中神経断面面積差評価は CTS 診断、患者主体の主観的評価とは相関を認めなかったが、正中神経（運動、感覚神経）障害の定量的評価に有用であった。

## 21. 整形外科領域神経障害性疼痛に対するプレガバリンの短期効果と副作用発現に関する検討

入内島崇紀, 白倉 賢二, 和田 直樹  
宗宮 真, 田澤 真之 (群馬大医・  
附属病院・リハビリテーション部)

【はじめに】 整形外科領域の神経障害性疼痛を有する患者に対し、2010 年にプレガバリンが保険適応となった。しかし、その効果および副作用についての報告は未だ少ない。今回我々はプレガバリンの短期的効果および副作用発現について検討したので報告する。【対象と方法】 2010 年 12 月から 2011 年 5 月までにプレガバリンを投与された患者 34 名を検討した。短期効果は Visual analog scale (VAS) を用いて評価した。副作用発現率、副作用発現と年齢、性別、および初回投与量との相関を統計学的に検討した。【結果】 患者の平均年齢は  $71.5 \pm 11$  歳であった。元疾患名は腰部脊柱管狭窄症、変形性脊椎症、頸椎症、頸髄損傷、陳旧性腰椎圧迫骨折、腰部椎間板ヘルニア、足根管症候群、肩関節周囲炎であった。プレガバリン投与前の罹病期間は平均 38.6 か月 (1-240 か月) であった。初回投与量は 75mg が 24 名、150mg が 10 名であった。投与前 VAS 平均 7 点、投与 1 週後 VAS 平均 4.3 点、投与 2 週後 3.3 点、投与 4 週後 2.8 点、最終観察時 (平均 8.6 週) 3.1 点であった。投与前に比べて投与 1 週後から有意に VAS が改善された。副作用発現率は 47% (16 名) であり、多くがふらつき、酩酊感、めまいを訴えた。副作用発現と年齢、性別、初回投与量に明らかな相関を認めなかった。副作用のため 26.5% (9 名) の患者が投薬を中止された。同じく 26.5% (9 名) の患者は症状

軽快のため、投薬終了が可能であった。【考察】 プレガバリンは整形外科領域神経障害性疼痛および慢性疼痛に対して短期間で効果を示すが、約半数に副作用を認めた。対象となる患者が高齢であることも考慮し、投与方法について今後も検討が必要である。

## 22. 頭頸部 free flap 連続 200 例を対象とした血栓形成危険因子の検討

牧口 貴哉,<sup>1</sup> 橋川 和信,<sup>2</sup> 宮崎 英隆<sup>1</sup>  
根岸 明秀,<sup>1</sup> 寺師 浩人,<sup>2</sup> 丹生 健一<sup>3</sup>  
田原 真也,<sup>2</sup> 横尾 聡<sup>1</sup>

(1 群馬大医・医・顎口腔科学)

(2 神戸大学大学院医学研究科形成外科学)

(3 同 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学)

【目的】 Free flap による頭頸部再建は確立された手術手技であるが、血栓による吻合血管の閉塞は未だ完全には克服できない合併症である。血栓形成危険因子を検討することは血栓形成予防に繋げるために重要である。頭頸部 free flap において、12 の因子と吻合部血栓の関連を血栓部位に分けた検討も併せて統計学的に解析した。【対象・方法】 頭頸部領域に施行した free flap 連続 200 例を対象とした。性別・年齢・肥満・糖尿病・高血圧・高トリグリセリド血症・蛋白尿・高コレステロール血症・術前放射線療法・術前化学療法・飲酒・喫煙、の 12 因子と吻合部血栓との関連についてロジスティック回帰による多変量解析を行った。血栓部位の違いによる危険因子の検討のため、静脈血栓のみの危険因子についても検討した。【結果】 術後に吻合部血栓を生じたのは 15 例 (7.5%)、flap を救済できなかったのは 8 例 (4%) であった。血栓部位の内訳は静脈血栓 7 例、動脈血栓 4 例、動静脈血栓 4 例であった。解析の結果、吻合部血栓の有意な危険因子であったのは、高血圧：オッズ比 4.45 [95% 信頼区間 1.30-15.3]、女性：5.48 [1.54-19.5]、高齢 (70 歳以上)：5.49 [1.49-20.2]、飲酒：9.21 [1.64-51.7] の 4 つであった。静脈血栓のみに限定すると有意な危険因子は女性：18.42 [1.65-205.52]、飲酒：89.21 [4.87-1634.81]、肥満：12.71 [1.42-113.80] であった。【考察】 本検討の危険因子が血栓形成に及ぼす原因を今後検討することにより、有効な予防策をこうじることが出来れば、頭頸部 free flap を更に確立した手技にすることが可能であると考える。